

大学放浪記 (7)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

いろいろな大学に行くと、その大学ならではの精神、信条などを表す標語を見かける。本報では、新しく移籍したマエジョ大学の例を記す。この大学では、エレベータのドアに5つの標語が写真を交えて書いてある。当初は気がつかなかったが、よくよく見て見ると、**MAEJO**大学と言う英語表記の頭文字を用いた標語である事がわかった。すなわち、それらは以下の様である。別の見方をすれば、英語の頭文字を集めた「語ろ合わせ」とみることができるが、それだけではない。問題はそうした標語に従って組織に属する関係者が果たしてどれだけ理解して、心得を堅持して勤務に当たっているかということである。

- 1) Mindfulness (心配り、相手や他人に対するちょっとした更なる配慮)
- 2) Aspiration (願望、願い、希望、)
- 3) Excellence (優秀、卓越、秀逸、優等)
- 4) Justice (正義、公正、公儀、善徳、善心)
- 5) Origin (原点、起源、元、由来)

いずれも、向かうべき方向、あるいは堅持すべき心得、その大学の信条などを表している。また食堂などに行くと、1) Spirit (精神), 2) Order (秩序), 3) Tradition, (伝統) 4) Unity, (団結) 5) Seniority (敬老)

などと、その場に合った、整然とした行動や、対応に心掛けるような「スローガン」にも似た言葉が書いてある。また、他人に配慮したひとつの教育でもある。一般企業での特に生産現場での心得である、Safety first (安全第一), Zero defect (欠陥品ゼロ), Cost down (生産コスト削減) がそれに相当する。いずれも一致団結して、標語の意味を心得として、目指す方向に進もうと言う意味である。

大学レベルの上記5つの標語で、筆者が常に「組織」として、あるいは「組織の長」が心得るべき重要な項目の一つとして常に掲げるのが Mindfulness (心配り、気配り、相手や他人に対するちょっとした更なる配慮) である。国家であれ、地方行政の府であれ、種々の規則や法律によって多くの規制があるから、普通にそのポストに就くだけでは差は生じない。同じ国家でも、地方政府でも、あるいはまた大学でも良い組織とそうでない組織という形で差が生じるのは何故か。それはそのポストに座る、あるいは座ろうとする人間が何を目的(目標)に、特に誰の為に、何の為に、そのポストに座ろうとしているかと言う視点で既に大きな差が生じているのである。猫をかぶり、嘘をつき、自らに不都合なことをひたすら隠蔽し、如何にもまともに見えるダブル・スタンダードを巧みに適用して、虎視眈々と這い上がってくる不埒な恥ずかしい人間が増えつつある。良いか悪いかハトも各多数決を基本とする選挙というスクリーンがかかって、今度はどうかと多少の期待を持

っても、現れるのは同じ類いの人間が延々と続く。だから組織も良くなれないし、「組織の長」としての任期も短期で終わる。職務に一生懸命になるのではなく、自己保身、延命にせつせと注力し、必死で周りを固める。組織の防衛より自己の防衛を優先する人間が多く成っている。

これまで長年に亘り見てきた大学と言う組織の中にも熾烈な戦いがあり、そうした中で現職にある者の対応は大体共通している。派閥を作り、公的資金を使って、集团的自衛権(?)を行使して自己もしくはその関連の一派の現職ポストを死守、延命を図ろうとする。目が常に内側、自分の周りを見ていて、外に向いていない。だから世の中の動きから取り残されていく。トピカル (Topical) な熟語 (Terminology) や言葉は知っているが、本当に理解していないから何を言っているのかわからない。はやりの語句を並べ立て、それらしきことを言っておけばその場はしのげるという感覚がすぐにばれる。SNSの急速な普及で、従来の新聞やテレビより多くの、また正確な情報が得られるようになり、いつまでも隠蔽し続けることが難かしくなっている。嘘だということがすぐにばれる。嘘もだんだんと巧妙になってきているが、ばれるのは時間の問題という時代になりつつある。後でばれてもかなわないが、なんとかその場を切り抜きたいという、まさにその場しのぎの対応が目立つ。これは新聞やテレビが放映する情報のみが「正しい」というイメージを与えてきた時代から、一般国民がさらにそれ以上の情報や知識を別のルートから得ることができ、正しいか正しくないかを判断できるようになってきたと言うことである。うかつなことは放映できなくなりつつある。視聴者の方が知識や理解度が高くなっているということであろう。

さて、話を本筋に戻す。標語はスローガンとして向かうべき方向、相互理解の心得的なものであるが、それに基づいた行動、挙動を組織(大学)に属する教職員がしているということが問題である。標語として掲げているだけでは意味はない。この観点から上記の標語をじっくりと噛みしめて見てみると、筆者がこれまで最も重視してきた Mindfulness (心配り) は確かに浸透しているようである。わずか2, 3ヶ月ですべてを検証する訳にはいかないが、日常勤務における教職員の対応がそれを示している。また前報にも記したが、そうした教育もなされている様であることが伺える。特に「稔るほど頭を垂れる稲穂かな」の如く、上位の人から下位の人に積極的に近づく態度、姿勢は筆者の想像以上のものである。大学としての決断は学長がするのが当然であり、筆者がごとき一時雇用の外国人ができることではないし、やってはいけないことである。必ずその地位にある人からの判断、決断を待つて対応しなければならない。緊急事態だが、大学の意思を確認したいとメールを出すと、即刻返事が来て、「その対応にはどのような内容を入れればよいか、も教えてほしい」と書かれていた。これが責任ある者のとるべきマネジメントである。そうでない管理職は「自分がそのポストにいるのだから、俺が決める」と言う面子が先に来る。こうなるとその後の人間関係、展開もややこしくなる。双方がいがみ合い、それが組織に広がり、全体が不愉快な雰囲気覆れる。結末はどうなるかというと明白である。それは

物を言う者の「排除」であり、意見を言った人間をその役から外す対応である。他の部下に協力しないよう通達し、それでその組織は衰退を辿る。ここの判断の違いが組織の将来の運命を決める。こうした事態に陥る原因の多くは

- 1) 経験不足なれど、「長」の指名により、たまたまそのポストに収まった若い世代の勉強不足、キャリア不足が主たる原因
- 2) 常に組織を良くしようと言う意識ではなく、自らの面子を優先している。
- 3) またさらに勉強して知識を得ようと言う積極性もない。自分に実力があったから指名されたかと勘違いか誤解をしている。仮にそうであったとしても、確認のために考えていることを関係者に尋ね、確認してから発信してもよいが、それをしない。
- 4) 要するに自分がその本職にあり、他の人間に相談する必要はない、と考えているらしい。前任者の後を受けて事業の担当をすることになっても、事業の趣旨、背景や経緯などに、一切目もくれず、うわべだけを見て「このようにやればよいのか」と早合点して、自らの提案が全くない。提案等ということはやる意思もない、あるいはやることがわからない、ことに通ずる。それでいて自分以外の者に干渉（提案）されたくないと言う「困った」考えが先にくるようである。

他の標語については、すべてを知るには時間的にも不足であるが、筆者が日頃考えている最も重要なことの一つである Mindfulness が「組織の長」自らの実際の行動で見られたことは極めて嬉しい。これぞ Hopeful university（希望のある、有望な大学）作りに向かう姿勢としての本気度を垣間見ることができたという満足感を得た。こうした行為により益々励まされ、全員の空気が「やる気」に反映する。良きマネジメントの例である。「組織の長」の座に就いた人の人間性に大部分は依るが、このことが時の管理者の良否の評価、判断を分ける。ここでは主に Mindfulness のみについて書いたが、後に続く Justice にも興味はある。上記のような不慮の事態に立ち入ったとき、果たしてどの程度この Justice が機能するかである。外国人と現地人の間には明らかに差があり、現地人が不利になることは決してない、と以前に書いた。また事態の收拾は「喧嘩両成敗」で終わると認識している。それには任命権者の面子が働き、責任回避が絡んでくるからである。しかしこの考えが管理者にある限り、上記のそれ以上の大学の繁栄は見込めない。「良いことはよい、悪いことは悪い」という判断が「組織の長」にできないと失望感を与え、その後のプロポーザル提案も少なくなる。

ここでさらに標語についていくらかを付記する。タイに来て最も苦手なのは（実をいうと最も嫌いなこと）は犬の存在である。どこに行っても犬がいくらか住み着いている。首輪をしていないから飼い犬ではないらしい。食堂でも、授業をする講義室にまで犬が入ってきて寝そべっている。1匹や2匹ではまだしも、1匹が吠え出すと仲間らしき他の犬が群れを成して集まってきて一緒に吠える。まさか噛みつかれることはないかとの気持ちは持っているが、歯をむいて向かってくる様子を見ると今にも飛びかかって噛みつかれるような恐怖を感じる。噛みつかれても傷害保険に入っていれば良いではないかなどと言う人

もいるが、そうした不必要な事態に巻き込まれること自体を避けねばならない。狂犬病の予防注射がなされているかどうかのチェックや、多少なりとも引っかけられたりした場合の傷の手当など、経費以外に浪費する時間が無駄になる。また関係者に不要な心配をかけた。日常の勤務に差し支える。できるならそうした事態に巻き込まれたいと念じて気を付けてきた。幸い、そうした事態に出会っても深刻な事態には至らず、良かったと思っている。タイの大学について改善点とは聞かれれば、真っ先に挙げたい事項であるが、学術的な事柄ではないので言うのをはばかる。かつての大学で首輪をつけた飼い犬にキャンパス内で次々に人が噛まれ、そのうち該当する犬の姿は消えた。おそらく事態が悪化することを恐れた飼い主がこっそりと連れ帰ったのではないかという噂が立ち、それでそのニュースは終わったので大きな騒ぎには至らなかった。動物の本能というか、犬は現地のタイ人と外国人を見分ける能力があり、正確に外国人に向かって吠える。日本では公的機関での犬の飼育は法律で禁止されていると理解しているが、首輪のない、いわゆる飼い主がいない犬への対応がどうなっているのかわからない。動物のすることだからと、寛大なのか食堂での食物の残渣を犬に施す光景も日常茶飯事である。動物愛護心が強いのか、あまり気にした様子もない。現地人にとっては問題はないかもしれないが、筆者のような外国人にとっては極めて迷惑であり、不愉快である。また恐怖感を誘発する。何とかならないかと思いつつ15年が経過した。しかし事態が変わったわけではない。そこで思い出したのが上記した標語の一つ Seniority（敬老精神）である。犬に吠えられている筆者を見て誰も犬を制止しようとしな。意地悪い見方をすれば、「外国人は犬に吠えられたとき、どのように対応するか」を興味をもって見守っているかにも見える。コロナ禍のせいで帽子をかぶり、マスクをしているから、筆者が高齢者、あるいは老人の部類に入るかどうかを見極めることができなかつたのかも知れない。しかし、何もせずに筆者を取り巻く学生の数人が、犬に向かって吠えないように制止するぐらいのことはしても良いのではないかと感じた。敬老精神とこの例を結び付けて考えるにはいささか無理があるやもしれないが、いささか残念な気持ちがおさまらなかつた。外国人であろうとなかろうと、吠える犬を制止するだけの Mindfulness があっても良いのではないか。さすれば言葉が通じなくても、新たな出会いの機会が生まれ、英語でのコミュニケーションへと発展する。こうした機会をうまく利用することで外国人を知り、コミュニケーションの機会を得ようというモチベーションを高くすることができる。

筆者はかつて大学院の博士課程の後半に一時的に大阪から京都に通っていたことがある。京都は観光都市であるから多くの外国人が京都を訪れる。京阪電車の特急に乗るべく、プラットホームで電車を待っていると4,5名ほどの外国人が小グループで筆者と同じ電車に乗るべく話をしているようであった。よく聞いていると英語ではなくドイツ語である。近い座席に乗り合わせれば、話す機会もあるだろうと思い、より近い座席に座り電車は動きだした。しばらくして車掌が「切符拝見」と言って回ってきた。筆者と同じように何か機会があれば彼ら観光客と話すことができるかもしれないと、同じような企てと期待を胸に

秘めて乗り込んできた若者もいたが、彼はてっきり英語を話す観光客とでも思っていたらしく、ドイツ語だということがわかって身を引いた。車掌が来て切符拝見と言っても彼らにはわからない。そこで片言のドイツ語で「車掌が切符を見せてくれと言っている」と通訳すると、「あなたはドイツ語ができるのか」ということで大変気に入ってくれた。ウイーン・フィルハーモニーの一員であると話したことを記憶しているが、時間があるので今日は京都見物に行く予定だという。どこに行くのかと尋ねると、最初は三十三間堂に行きたい、あなたは知っているか？というので、京阪七条で下車して歩けばすぐであるということをつけて別れた。わずかの時間ではあったが、ドイツ語を話す機会を持たれたことに満喫した。なぜこの話をわざわざここに記したかという理由は興味を持つこと、モチベーションを高めること、恐れずチャレンジすることでチャンスと呼び寄せることができること、を後に続く若者に伝えたいからである。社会や企業という組織の一員として生きるためには素早く反応し、行動すること、無気力無反応が組織の最大の敵であるということに改めて強調しておきたい。犬に吠えられている老人、高齢者を見たらじっと見守っているのではなく、素早くとるべき行動を起こす若者であってほしい。老人、高齢者ということで奉ってくれとは言わない、しかし少なくとも「敬老精神」を標語に掲げているのなら、その精神に沿った反応、挙動、行動があってほしいと感じたからである。動物愛護心もよし、犬に餌をやるのもその気持ちは寛大で良いと思うが、本来犬が「大学に必要な理由」はない。むしろ人を噛むなどと言った事件につながる危険性をいつまでも放置しておくことは、大学のセキュリティの面から考えても、到底認めにくいものと外国人である筆者は考えるが、これも文化や伝統の違いという切り口から、何の手も打たれることなく放置されるのであろうか。「国際化大学」、「研究大学」がこれからの大学が生き残るために必要なキー・ワードであると認識するならば、然るべき対応を講じるのが一般的な考えではなかろうか。大学における犬の存在の必要性は、強いて言うならば残飯処理と負う部分にあるが、必ずしも大学で給餌する必要はない。外国人としての筆者としては「タイの大学として改善して欲しい」一項目である。これも国際化への一歩ではなかろうか。文化や伝統は大いに尊重すべきであるが、その一方では国際化への意識改革、努力が必要ではないであろうか。

ところでこの原稿を書き終えてから、学内の食堂に向いて座った席の近くの柱に、犬に関する注意書きポスターらしきものを見つけた。次の日にスタッフに写真を見せて内容を確認した。それによると大学では学内で犬を飼うことを禁じている。また「犬に餌をやることも禁止」している。したがって学内の食堂で見かけ、吠えたりする犬は飼い犬ではないことを確信した。その証拠にそれらの犬は首輪をしていない、と言う返事であった。では噛まれた時の狂犬病予防注射などへの対応はどうなっているのか、と尋ねると大学が費用を出して予防注射をしているという返事であった。一応なすべきことはなされている様である。あとはどのようにして飼い犬でない、いわゆる野良犬を学内から排除するか、である。組織としての、あるいは組織の長としての判断を期待したい。



マエジョ大学記念塔
(Orchid tower 左, Clock tower 右)



マエジョ大学管理棟（学長室、副学長室
などがある）。筆者のオフィスも4階の学
長室の隣にある



犬に関する注意事項を示す注意書きポスター